

## 恵解山古墳と 山崎合戦

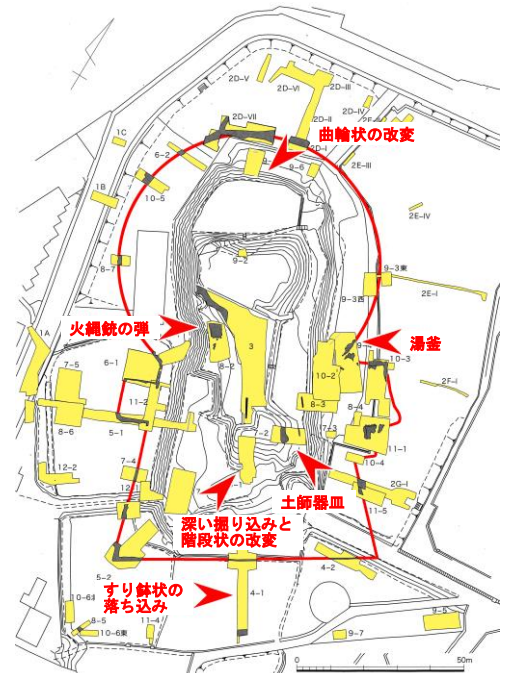
展示期間 令和2年1月15日（水）  
～令和2年3月29日（日）  
※図書館休館日を除く

天正10年(1582)6月2日、本能寺で織田信長を討った明智光秀は、その11日後の6月13日、備中高松城攻めから急ぎ戻った羽柴秀吉と戦うこととなります。以前は天王山の戦いと呼ばれていましたが、実際の合戦の舞台は現在の大山崎町から長岡京市の勝龍寺城付近一帯であったため、現在は山崎合戦、あるいは山崎の戦いと呼ばれています。史跡恵解山古墳は明智光秀の本陣跡とする説がありましたが、史跡整備に伴う発掘調査で、新たに戦国時代の遺物や曲輪状の改変痕などが見つかりました。これらについて周辺での調査を含めて紹介します。

### 恵解山古墳の調査

恵解山古墳は古墳時代中期（約1600年前）に作られた乙訓地域を治めた豪族の墓です。昭和55年（1980）、墓地の拡張工事中に、前方部から鉄製武器が700点近く出土し、翌昭和56年に国の史跡に指定されました。平成15年（2003）からは、範囲確認と保存整備に伴う調査が行われ、平成26年（2014）恵解山古墳公園として開園しました。現在は市民の憩いの場として親しまれています。発掘調査では古墳に関する成果のほか、後の時代に恵解山古墳が利用された状況も明らかとなっています。

まず第一に、後円部が2段または3段に改変されていることが判明しました。これは後円部北側を平らに削ったのち、改めて土を盛り直したもので、山城にみられる曲輪と呼ばれる平坦部そっくりの形をしています。どうやら後の時代になってこれを墓地に利用したようです。古墳をこのように陣城として利用する例は各地で見られますが、盛土内からは遺物が出土していないため、いつこのような改変がなされたのかは不明です。ただ前方部でも深い掘り込みや階段状の改変が見られ、また前方部周濠の底ではすり鉢状の小さな穴が並んで検出されました。どのような性格のものかは不明ですが、これらの造作も曲輪状の改変と同じ時期に行われた可能性があります。



恵解山古墳の改変部と  
戦国期出土遺物（1/4500）



曲輪状に改変された後円部（北から）

第二に、墳丘上から戦国期の土器が出土しています。土器は前方部東側から完形に近い土師器皿はじきや白磁皿はくじが、後円部東側からは瓦器の湯釜片がき ゆがまなどが出土していて、この時期に古墳が何らかの目的をもって利用されていたようです。

第三に、くびれ部付近から火縄銃の弾が6点出土しています。出土地点は古墳の西側くびれ部で、天王山側の斜面部になります。恵解山古墳周辺では以前から火縄銃の弾が出土していましたが、くびれ部で見つかった弾はそれよりも大きくて重く、大半は着弾時の変形がみられました。これはまさしく恵解山古墳が戦場となった証拠と言えます。

## 周辺の調査

恵解山古墳の西方約100mで行われた調査では、南北方向の堀の跡が約68mにわたって見つかりました。堀は幅約4m、深さ約2mで、断面の形は場所によって微妙に異なり、逆台形や「V」字型を呈しています。昔の航空写真を見ると、南と北にも堀の痕跡らしいものが確認でき、400m近い長さがあった可能性があります。堀の遺物は非常に少量ですが、戦国期の土師器皿てんもく、天目茶碗、白磁さかすきの盃、瓦器の湯釜などが出土しています。

実はこれとよく似た東西方向の堀の跡が600m南で見つかっています。堀は西で南に折れ曲がり、幅2~4m、深さ1~1.8m、断面は「V」字型を呈しています。こちらも遺物が少なく時期は不明ですが、北東150mの段丘上には、昭和の終わりに明智光秀の本陣説が出された境野1号墳さかいの（大山崎町）があり、この堀がその根拠の一つになっています。ただ江戸時代の絵図では、光秀の本陣は恵解山古墳付近に、境野1号墳付近は光秀家臣の津田与三郎の陣として描かれています。

これら恵解山の改変や大規模な堀の掘削は一体、いつ、だれが、何のために行ったのでしょうか。果たして明智光秀なのか、それとも別の人物が別の目的で行ったのか、謎解きの興味は尽きません。



恵解山古墳から出土した戦国時代の土師器皿、白磁皿、火縄銃の弾

恵解山古墳



恵解山古墳と西側で見つかった堀（北西から）



堀の断面（北から）



境野1号墳の南西で見つかった堀（東から）